



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介（三）：「関西の文学運動」                                           |
| Author(s)    | 斎藤，理生                                                                       |
| Citation     | 阪大近代文学研究. 2019, 17, p. 151-157                                              |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/71761">https://doi.org/10.18910/71761</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 《資料紹介》

## 織田作之助全集未収録作品紹介 (三)

## 「関西の文学運動」

斎藤 理生

前々号、前号に引き続き、織田作之助の全集未収録資料を紹介する。一九四一（昭和一六）年一月三日付の「関西大学新聞」第一〇六号の第四面に掲載された「関西の文学運動」という評論である。なお「関西大学新聞」は、関西大学図書館で原紙を閲覧させてもらった。

いわゆる大学新聞は、一九一七年七月六日に創刊された慶応義塾の「三田新聞」を嚆矢として、一九二〇年一月二五日に東京帝国大学の「帝国大学新聞」が続いて以来、多くの大学から発行された。それぞれの大学新聞によって、学生と学校組織との関係や編集方針は様ではないが、一般的には学生が主となって、教職員・在学生・卒業生を読者に想定して編集した新聞だと言える。そのため紙面は、学内の制度、人事をはじめとする動向や、関係者の消息、活躍を報じた記事、教員による時事解説、論説などが中心を占める。ただ一九二〇年代後半から四〇年ごろにかけては多くの大学新聞に

思想・文藝記事が見られるようになり、そこに学外の執筆者が寄稿することも珍しくなかった<sup>(1)</sup>。最も多く見られるのは作家が母校に執筆するケースだが、必ずしも所縁のある大学に限らなかった。むしろ各々の時期に編集に携わった学生たちが、その時々々の企画に見合ったり、各人が思い入れのある作家に依頼したりしたというのが実情であつたろう<sup>(2)</sup>。

たとえば一九三〇年四月に東京帝国大学に入学し、三五年九月に除籍となった太宰治は、「帝国大学新聞」に掌篇「盗賊」（一九三五・一〇・七）、随想「校長三代」（一九三八・一〇・三一）、「正直ノオト」（一九三九・五・一五）、「鬱屈禍」（一九四〇・二・一二）、「独語いつ時」（一九四〇・一・二五）など毎年のように母校の大学新聞に執筆の機会を得ているが<sup>(3)</sup>、並行して「走ラヌ名馬」（工業大学蔵前新聞）一九三一・七・二五）、「音に就いて」（早稲田大学新聞）一九三七・一・二〇）、「心の王者」（三田新聞）一九四

〇・一・二五)、「貪婪禍」(京都帝国大学新聞 一九四〇・八・五)、「世界的」(早稲田大学新聞 一九四一・一〇・一五)など、他の大学新聞にも書いている<sup>(4)</sup>。

一九三一年四月に第三高等学校に入学し、三六年三月に退学となった織田作之助の場合、「歴史と小説」(京都帝国大学新聞 第三四六号、一九四二・五・五)および「多角形的小説の流行——小説の思想と小説の中の思想」(京都帝国大学新聞 一九四三・三・五、後に「文楽的文学観」に改題)を書いていることは知られてきた。

今回、複数の大学新聞を調査する過程で、まず初出が知られていなかった「ささやかな覚悟 作家の文学的精神にふれて」が、「九州帝国大学新聞」第二二九号(一九四〇・一二・九)第四面に掲載されていることがわかった。この随想については、九州大学附属図書館による「九大コレクション」の画像データ公開によって、Web上で閲覧することが可能である<sup>(5)</sup>。

この他に、新たに発掘された資料として、後に掲げる「関西の文学運動」の他に、以下の二つの評論がある。

「小説の本質」(関西学院新聞 第一七〇号、第三面、一九四〇・一二・二〇)

「大阪の文学 地方文学論の否定と真に大阪的な作家としての西鶴論」(関西学院新聞 第一八二号、第四面、

一九四二・二・二〇)

ただし「関西学院新聞」は、関西学院図書館デジタルライブラリによる画像データ公開によって、やはりWeb上で閲覧することが可能であり<sup>(6)</sup>、紙幅の都合もあって、ここでは紹介しない。また、この他に「年齢について」が一九四三年三月三日付の「龍谷大学新聞」に掲載されているようであるが、当該号は龍谷大学図書館にも所蔵されておらず、確認できなかった<sup>(7)</sup>。

「関西大学新聞」は一九三二年に創刊されているが、関西大学図書館で実物を確認できたのは一九三四年以降のものである。三九年度までは文学者はほとんど執筆していないが、四〇年から急に批評家・詩人・作家の名前が紙面を飾るようになる。矢崎弾「純文学作家と通俗小説の問題」と板垣直子「文学の地方的発生」が第九六号(一九四〇・五・二〇)に、安西冬衛「詩とその周囲」が第一〇〇号(一九四〇・一二・一〇)に、十返一「自我の喪失と現代文学」が第一〇一号(一九四一・一二・一)に掲載されている。第一〇六号に掲載された作之助の文章は、「関西文化建設の方法」という特集の中で、石山徹郎「現代文化の諸問題——大阪を中心として——」、中野繁雄「臨戦下の文化及び文化運動」、大岡欽治「国民演劇の進展——新劇に就ての感想——」、半田薺「関西文化の振興」と共に掲載されたものである。その後も岩上

い。おそらくその代わりに、藤澤桓夫「青春」が第三号（一九四六・五・一）に掲載されている。

順一「歴史小説管見 現代日本歴史小説への反省」が第一〇七号（一九四一・一一・一九）に、十返一「文学と民族意識——国家に帰納面於ける文化——」が第一一〇号（一九四二・六・二四）に、小田切秀雄「国民的感情の発露 文学の位置について」と赤木俊「文化批評への反省 文化建設に於ける文学者の新しい地位」と中河興一「共栄圏に於ける文化問題——指導理念の確立と日本文化——」が第一一一号（一九四二・七・一八）に、板垣直子「芥川歴史文学の史の意味 今後の歴史文学の方向」が第一一三号（一九四二・一二・一九）に掲載されている。

戦争の長期化に伴って、大学新聞は軒並み時局を反映した記事が中心になり、文学者の言説に紙面を割くことは減る。用紙は不足し、学生が主体となって編集に携わることも難しくなり、休刊・廃刊してゆく。一九四〇年に芥川賞候補となり、「文藝推薦」を受賞して文壇に本格的にデビューした作之助は、大学新聞の文藝欄が最も華やかだった時代には間に合わなかったことになる。しかし四〇年から四三年という短い間に、関西のさまざまな大学の新聞に書いていることは、当地で文学を愛好する青年たちに、地元の新進作家として期待されていたことをうかがわせる。

なお戦後、一九四六年三月二八日付で、京都大学新聞社から出されていた「学園新聞」に短篇小説の寄稿を求める手紙が織田文庫に所蔵されているが、作之助が執筆した形跡はな



## 関西の文学運動

織田作之助

「関西に於ける文学運動の方向」といふのが私に与へられた題目だが、実は私はこの題目に弱つてゐる。

身も蓋もない言ひ方をするが、たぶん私は理想論を語ることを求められてゐるだらうと想像するが、ところがそれが私には厄介なのだ。

抽象力を武器とする批評家なら恐らくそれは容易だらう。

彼が設定した文学の理想に向つて、論理の辻褄を合はせて行けばよいのだから。むろん、作家といへど絶えず理想にすがつてゐるわけだが、しかし作家の場合、彼の作品といふ現実につねに引戻されながら、つまり、現状に即しながら物を言はねばならぬのである。「」つまりいへば、自己を柵にあげて理想論をやるわけにはいかないといふのである。「」それが消極的な態度か、積極的な態度か、いまにはかにここで論ずる余裕はないが、少くともそれは作家の誠実の一つであり、かつ物を言ひ、物を書く礼節の一つではなからうかと私は思ふ。人は知らず、少くとも私は、自己を柵に上げた大雑把な文学理想論をすることに羞恥を感じてゐる。情熱を喪失した、若き世代の厄介な羞恥心だといへば、それまでだが……。

しかし情熱はもつてゐる。「」たとへば関西の文学運動にも情熱を感じてゐる。けれど、それに就て語らうとすると、私のほかに棲んでゐる一匹の天邪鬼は、

「徒らに大言するな。みだりに壮語するな」

と、私に囁く。

また曰く、

「いつたいに関西に文学運動と称するものがあるのか。文学運動なんて大袈裟な言葉は文学青年の自慰的な言葉に過ぎぬではないか」

全くさう言はれへば、二言もない。正直な話、私の天邪鬼が言ふ通りである。

かつて関西に「辻馬車」を中心とする文学運動があつたが、それが僅かに指摘されるだけ、あとたしかに文学運動と称すべきものは残念ながら一つもなかつた。まこと「辻馬車」以後、関西は全く文学運動の空白時代だつたといへる。作家も出なかつた。また新風を掲げて大きく文壇に訴へた同人雑誌もなかつた。してみると「関西に於ける文学運動」といふ言葉は、全く伊達に使はれてゐたのに過ぎなかつたのである。

だからといって、果して関西といふ土地は文学不毛の地だらうか。いひかへれば、関西に於ける文学運動は全く不可能なものだらうか。

いや、そんなことはない。少くとも私は、不可能だといつて引退つてしまひたくはない。

今日しきりに論じられてゐる文化地方散論や地方文学論の威勢のよい掛声の尻馬に乗るまでもなく、関西といふ土地柄から考へて、文学運動が行はれぬ筈はないのである。敢て

今日、明日を問はずこの伝統と魅力と發展性に富んだ関西といふ土地は、そこに住む作家へつねに倖ひなる刺激を与へてゐる筈である。

それにもかゝらず、文学運動が行はれなかつたのは何故か、極めて少数の作家しか産まなかつたのは何故か、外部のせい、内部のせい、結局内部のせいだ。外部、すなはち土地乃至人間の対象として十二分の魅力を備へてゐる。

たゞ、いはゆる関西の文学志望者乃至同人雑誌作家がこの魅力の表現を怠つたのにほかならない。郷土の天地山川や人間性を理解することを忘れ、はげちよろけのペンキ塗りみたいな標準文学（この標準といふ言葉は藤澤桓夫氏の隨筆集「大阪手帖」に極めて巧みに使はれてゐる）の皮相的な理解にのみ徒らなる努力をしてゐるために他ならない。

たとへば西鶴を読むかほりに、ちよつとだけヴァレリイを囓るあるひは大阪人を觀察し、大阪弁のニュアンスにふと心を惹かれるかほりに、どこの国の人間かも分らぬやうなモダンガールやモダンボーイの蒼白き議論の浅薄な結論づけに憂身をやつす、——一事が万事であつた。なんだかんだと言ひながら、今もなほこれと五十歩百歩の人が多い。これでは文学運動の掛声も所詮寢言にすぎないのだ。口に新体制文学論をとらへ、国民文学論を青年文学者会などの席で怒号しながら実は、喫茶店で紅茶を注文してゐる場面ばかり一生懸命に書いてゐる。あるひは、職業婦人へ感じた愛情の自慰的な

理屈づけに夢になつてゐる。失恋して満洲へ行く。満洲の方ではありがた迷惑だ。そんな作品ばかり書いてゐて、何の文学運動だらうか。

それともう一つ、過去の関西に於ける同人雑誌には致命的な通弊があつた。

その一は、彼等の文学論及びその作品が、つねに誰かの借物であつたこと。評論は引用だらけ、作品はあくまで模倣、すなはち独創への情熱がなかつたのだ。その二は、変な文学觀念論をうのみにして、技術といふことを本能的に輕蔑したこと。つまりデッサンも出来てゐないうちに觀念といふ色をぬりたがつたこと。したがつて第三は、作品の水準に対する反省がなく、無反省に自己の安易な作品を活字にしたがつたこと。すなはち、道楽と自慰から、雑誌を發行したこと。

それが過去の、そして現在の関西に於ける文学運動と稱するものゝ正体である。と、ここまで論じて来れば、もはや明瞭と思ふが、もし今後関西に文学運動が起るとすれば、まづ右の通弊を是正することから始まるのが本当なのではなからうか。しかし、この仕事は至極地味な仕事である。少しも華々しくはない。どうでもよいことだと、輕蔑されさうな仕事である。けれど、私は断言するがこの過去の通弊を是正して行くといふ仕事から始めぬ限り、今後関西にいかなる文学運動が起るとしても、それはまづ自慰に過ぎぬであらう。そしてこの仕事の次に何が来るか。すなはち眞の関西文学

運動の方向はいふ点になると、人おのおの意見もちがふであらうし、ここで強引に私の意見を發表する気もない故、ここではただ右の愚見だけに止めたいと思ふ。

但し、以上述べた事情だけは敢て私の独断ではなく、万人ともに納得すべき筈のものであることだけは、はつきり断言し得ると思つてゐる。

（引用にあたつて、ルビは省略した。また「。」は原紙で行末に位置しているために句点が省略されたと思しい部分に論者が補つたものである。）

なぜ作之助に「関西に於ける文学運動の方向」という原稿の依頼があつたのだろうか。ひとつには、前年の夏から文藝誌や総合誌に継続的に作品を發表し、関西在住ながら中央で認められつつある作家として期待されていたことがあろう。

ただ主要な理由としては、「海風」が七月に終刊し、一二月から大阪の同人誌を統合して輝文館から創刊された「大阪文学」の実質的な中心と目されていたことがあろう。この特集には、「すでに文化雑誌の統合、各藝術部門の大同的組織、大学クラブ連盟、精勤作家協会、関西文化連盟などの組織はできあがつた。しかし文化そのものゝ自主性にもとづいたものでなく、強力に文化を利用し応用しようとする嫌があるやうである」という状況への懸念が記されているからである。

作之助は「大阪文学」創刊号の「編輯後記」を、「われわれは徒らに大言し、みだりに壮語したくはない。実際の仕事を伴はぬ空虚な宣言は、少くとも文学者にあつては特に慎むべきことであると、痛感してゐる故である」と書き出している。また、「参加した同人はすべて大阪の文化の向上といふことに真剣に想ひをいたしてゐる筈ゆゑ誰一人として文学青年的自慰には陥つてをらぬ」、「伊達や道楽で雑誌を發行したり、作品の水準に対する反省なくして單なる思ひ上りや己惚れから、手当り次第に活字にしたりする趣味は、われわれには些かも無い」、「われわれは、ともあれ先づ、作家としての眼が出来てゐない作品、技術的に水準の低い作品、自己満足的な安易な態度で書かれた作品を、「大阪文学」から排除した」などと述べている。「関西の文学運動」の主張がこの「編輯後記」と通底していることは、時期的にも、字句の一致からも明らかであらう。「辻馬車」に言及したのも、成功した同人雑誌として目標にしていたからにちがいない。

作之助はこの評論で、関西に文学運動が行われなかつた理由を二つ挙げている。一つは、「関西の文学志望者乃至同人雑誌作家」が関西という土地の「魅力の表現を怠つた」こと。もう一つは「過去の関西に於ける同人雑誌」に「致命的な通弊」があつたことである。「致命的な通弊」については、獨創性の欠如・技術の輕視・道楽による刊行という三点を課題として指摘している。これらも「地方文学」（隨筆四季）一

九四一・一〇）や「雷の記（二）——田木繁へ——」（『大阪文学』一九四二・一〇）など、同時期の評論における主張と重なっている。

総じて「関西の文学運動」は、「大阪文学」を拠点に意欲的な活動を試みようとしていた一九四一年から四二年にかけての作之助の立場と方針とが示された評論であると言えるよう。

## 注

- (1) むろん時期によって差はある。たとえば一九三〇年代の变化について、向坂逸郎「大学新聞論【三】反映する大学生」（『讀賣新聞』一九三六・七・四）は、以前は「多くの場合、学校当局に対する反対派的性質をそなへてゐた」が「多くの大学新聞から、一頃のラディカリズムの華さはなくなつて」といると指摘されている。
- (2) たとえば「座談会 戦中・戦後の『三田新聞』を語る」（『近代日本研究』一九九六・二）で白水英一郎は「いろいろな文化人、学者たちと会えるということが一つの楽しみでございました。私も石坂洋次郎さんとか、いろいろな人に原稿依頼に行ったり、鈴木信太郎画伯に絵をお願いした記憶があります」と回想している。また、一九三三年に東京帝国大学に入学し、「帝国大学新聞」に携わっていた田宮虎彦について、青山光二は「生」の蕩尽への「同意」——織田作之助『世相』の周囲（『en-taxi』二〇〇四・一一）で「田宮は大学新聞をやつてい

て、文芸時評や同人雑誌評を武麟に書かすわけですよ」と証言している。

- (3) 太宰治と「帝国大学新聞」との関係については、平浩一「帝国大学新聞——掌篇「盗賊」の背景と「逆行」」（『太宰治スタディーズ』二〇一〇・六）を参照されたい。

- (4) 「待つ」も一九四二年三月五日付「京都帝国大学新聞」に掲載される予定であったが、時局にふさわしくないとの理由で掲載されなかった。井原あや「太宰治「待つ」論——「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」（『大妻国文』二〇〇三・三）を参照されたい。

- (5) 「九州帝国大学新聞」<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/publications/kyushu/univshinbun> 二〇一九年三月一日確認。

- (6) 「関西学院新聞」<https://library2.kwansei.ac.jp/e-lib/KGshinbun/no4.htm> 二〇一九年三月一日確認。

- (7) 山内乾史「織田作之助著述一覧稿（Ⅱ）——昭和一八年～二一年三月——」（『近代』一九九六・二）および関根和行『増補・資料織田作之助』（日本古書通信社、二〇一六）でも初出紙未見となっている。

〈付記〉本研究はJSPS科研費 17K02450の助成を受けたものです。

（さいとうまさお／本学准教授）